

『ロミオとジュリエット』から『ハムレット』へ

死のモチーフの変奏

松浦 美佐子

1. 序

近年の素材研究では、シェイクスピア自身の作品も素材に含める考え方がある(Skura 2018: 226)。これに拠れば『ロミオとジュリエット』とその原話であるアーサー・ブルックとウィリアム・ペインターの作品も『ハムレット』の死のモチーフの素材とみなすことができる。具体的な事例の一つが婚礼と葬式の対比である。婚礼の朝、ジュリエットの死を嘆く父の悲嘆は、婚礼が葬式に一変する対比に描かれる(4.5.84-90)。ブルック(2507-15)に負うこの対比は、『ハムレット』では葬式から婚礼へと反転される。1幕2場冒頭の悲しみと喜びの対比(1.2.1-14)には、義姉との近親相姦婚を正当化させんとする王の企みが潜んでいる。これに呼応するのが、ホレーシオの“your father’s funeral” (1.2.176)に応じるハムレットの冷笑的な“my mother’s wedding” (1.2.178)という科白である。『ロミオとジュリエット』では悲しみの表現であった婚礼から葬式への変化は、『ハムレット』では、宮廷の腐敗や陰謀、王の狡猾さ、それに対するハムレットのやるかたない心情の表現へと巧みに変奏されている。

『ロミオとジュリエット』と『ハムレット』の来世観にも同様の反転が見られる。『ロミオとジュリエット』とその原話に描かれたキリスト教的なゆるぎない来世観は『ハムレット』では懐疑と不安の対象となる。その背景には、キリスト教だけではない、古典や人文主義などの影響が指摘されている(Poole 2018: 696-97; Edwards 2019: 153)。ちょうど『ハムレット』の創作時期にあたるころフィルモン・ホランドが英訳したプリニウスの『博物誌』第7巻「死と死後の魂について」には、死後の世界を否定する一節がある(ウェザーレッド 2013: 57)。その死生観はちょうどハムレットの第3独白に示された来世への懐疑に重なるものである。

2. 死のモチーフの変奏

1) 四肢解体から分解へ

死のモチーフにおいて、シェイクスピアを特徴づけるのは、原話と比較しての四肢解体描写の減少である。ペインターの“cut you in pieces” (88), “the ground was all couered with armes, legges, thighes, and bloude” (95), ブルックの“they will dismember her” (2395)など、原話に溢れる具現的四肢解体の描写は失われ、ジュリエットがロミオを待つ場面の“cut him out in little stars”(3.2.22)のような比喩的な愛の夢想へと変容する。また、原話のサクソで、ポローニアスに相当する王の友人をアムレスが切り刻み豚の餌にする“cutting his body into morsels, ...and flung it through the mouth of an open sewer for the swine to eat” (Bullough 1973: 65) という場面も、『ハムレット』では「ウジ虫の食事」に置きかえられている。

2) 「ウジ虫の食事」

もちろん、「ウジ虫の食事」はありふれた死のイメージである。しかし、原話とシェイクスピアでは、それぞれの「ウジ虫の食事」が異なる役割を担っていることが分かる。原話のジュリエットは恋人の亡骸が「ウジ虫の食事」となることを嘆くが、シェイクスピアのジュリエットの嘆きに「ウジ虫」への言及はない。代わりに、「ウジ虫の食事」は死にゆくマキューシオの科白“*They have made worms’ meat of me*” (3.1.98)に移しかえられている。この違いは愛と対立の世界を明確に区別したシェイクスピアの劇の構造に拠る。死を象徴する「ウジ虫の食事」は恋人たちの世界に置かれるべきではない。その証拠にロミオの科白でも、ハエのイメージは“*they[carrion flies] may seize / On the white wonder of dear Juliet’s hand, / And steal immortal blessing from her lips*” (3.3.35-37)と、恋人との戯れを想う媒体である。しかし、同じ愛でも、ハムレットとオフィーリアでは“*if the sun breed maggots in a dead dog, being a good kissing carrion*” (2.2.179-80)のように死肉に湧くウジのイメージで性愛の淫靡さが強調され、陰謀と腐敗に満ちたデンマークの宮廷のありさまを反映するものとなっている。

3) 土に求める

さて、ポローニアスの死体の隠し場所を“At supper” (4.3.17)とはぐらかしたハムレットは、“Your fat king and your lean beggar is but variable service, two dishes, but to one table” (4.3.23-24), “A man may fish with the worm that hath eat of a king, and eat of the fish that hath fed of that worm” (4.3.25-26) と、死の平等性を食物連鎖の概念の中に展開していく。これは、5 幕 1 場の、生前の身分にかかわらず墓場では皆等しく“my Lady Worm’s” (5.1.74)であるという認識につながる。さらに、アレクサンダー大王でさえ、死後は土に還り、その土は粘土になり、それが酒樽の栓となると、諧謔的な科白で客観的に死を捉える(5.1.176-79)。1 幕 2 場で王妃は悲しみに沈む息子を“Do not forever with thy veiled lids / Seek for thy noble father in the dust” (1.2.70-71)と諭したが、この「土に求める」ことこそがハムレットの死の考察を特徴づけるものである。

3. 結

『ロミオとジュリエット』は、その原話も含めて、愛も悲しみもそのまま表現される裏表のない世界に描かれる。その死のモチーフを、ものごとの表面と内実が異なるデンマークの宮廷に置きかえるなら、言葉の意味や構造は変容を始める。『ハムレット』における死のモチーフの変奏は、その裏表のある劇世界の反映である。喜びと悲しみの対比構造は反転し、悲しみの言葉は悲しみ以外の意味を含意する。死のクリシェである「ウジ虫の食事」も、デンマークの宮廷の腐敗が愛をも蝕むさまを描き出すとともに、「酒樽の栓」に至る死の平等性の客観的理解へとハムレットを導いていく。

「酒樽の栓」において客観的に死を理解したかに見えたハムレットは、直後のオフィーリアの葬儀で極めて個人的な死に直面することとなる。『ハムレット』における死の考察は大団円へと向かう過程でさらなる変化を続けていく。

参考文献

Brooke, Arthur. *The Tragicall Historie of Romeus and Juliet*, 1562.

<http://www.canadianshakespeares.ca/folio/Sources/romeusandjuliet.pdf#search=%27Arther+Brooke+Romeo+and+Juliet%27>

Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare, Volume VII Major Tragedies: Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth*. London: Routledge, 1973.

Cressy, David. *Birth, Marriage, and Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England*. Oxford: OUP, 1997.

Painter, William. *The Palace of Pleasure: Elizabethan Versions of Italian and French Novels From Boccaccio, Bandello, Cinthio, Straparola, Queen Margaret of Navarre, and Others*, Volume 3, Joseph Jacobs, ed. London: David Nutt in the Strand, 1891.

<https://www.gutenberg.org/files/34840/34840-h/34840-h.htm>

Plinius Secvndvs, Gaius. *The Historie of the World: Commonly called, the Natvrall Historie of c. Plinius Secvndvs. Translated into English by Philemon Holland Doctor of Physicke*. London: Adam Islip, 1601. <https://penelope.uchicago.edu/holland/index.html>

Poole, Kristen. “Theater and Religion” in Bruce R. Smith, ed. *The Cambridge Guide to the Worlds of Shakespeare: Shakespeare’s World, 1500-1660*, Volume I. Cambridge: CUP, 2016.

Shakespeare, William. *Hamlet, Prince of Denmark*, third edition. Philip Edwards, ed. Heather Hirschfeld, rev. Cambridge: CUP, 2019.

_____. *Romeo and Juliet*, G. Blakemore Evans, ed. Cambridge: CUP, 1984, 2003.

Skura, Meredith. “Multiple Materials and Motives in *Two Gentlemen of Verona*” in Dennis Austin Britton, and Melissa Walter, eds., *Rethinking Shakespeare Source Study: Audiences, Authors, and Digital Technologies*. New York and London: Routledge, 2018.

ウェザーレッド、H. N. 『古代へのいざない プリニウスの博物誌』＜縮刷版＞別巻 1. 中野里美訳、雄山閣、2013.